

# 『鏡の中のミッチャン』

矢鳴 蘭々海

9,730文字

あらすじ(140文字):

平成七年に起きた阪神・淡路大震災で、当時中学一年生だった陽子は同級生で友人のミッチャンを失った。ミッチャンはとても丁寧に掃除をする心優しい女の子だった。彼女が死んだのは自分にも原因があると考えた陽子は、家事代行サービスの仕事で窓の掃除をしながらミッチャンのことを思い出してしまう。

※2ページ目から本編です。

十月中旬。マンション十五階のバルコニーには、秋の到来を告げる涼やかな風が絶えず吹いて心地良い。柵の外に広がるのは大阪の都市部を一望できるパノラマ風景。新駅が開発予定のこのエリアは、車や人の往来も多く見ていて飽きない。部屋の窓拭きの仕事で来たのに、つい目が壮大な風景に行きがちになる。曇り空の中の太陽は雲に隠れて見えないが、窓ガラスの汚れが見える程度には十分明るかった。

「高田さんだけに、高い所が好きなのね」

他のスタッフにそう言われて我に返った。

「すみません。昔から綺麗な景色が好きなんです」

言い訳をしながら、手を止めていた窓拭きを再開する。

家事代行サービスのアルバイトを始めたのは約半年前のことだ。結婚してほどなく生まれた一人息子も十歳になるとあまり手がかからなくなり、将来への不安もあって自分で稼ぎたいと思うようになった。ママ友の紹介で入ったこの会社は、個人経営のわりには清掃スタッフへの教育が厳しく、始めた当初は驚きの連続だった。中でも強烈だったのは、トイレ掃除の際にはブラシではなく直接自分の手を(ゴム手袋着用とはいえ)便器の奥に突っ込んで汚れを落とせという指導だった。市販のブラシだと死角になる場所があって落としきれない汚れが出てくるが、手を使えば隅から隅まで汚れをこすり落とせるからだ。ある程度は覚悟していたつもりだがこれを聞いた瞬間、背筋がゾットしたのを今でも覚えている。

初めて実際に他人の使った便器の奥に手を入れた時は、水面が顔の近くに迫って嫌悪感が喉から飛び出しそうになった。

「こういう時、もしミッチャンなら……きっと物怖じもせず掃除するやろな」

死んだ昔の友人のことを思い浮かべると、嫌悪感の波が即座におさまり、私の手は自然と便器の奥を丁寧にこすり始めた。ゴム手袋のおかげで思ったほど感触はなく、抵抗感が消えていくのと同時に、ここまで来たら徹底的に汚れを落としたい気持ちにさえなった。便器の側面から剥がれ落ちた汚れが水面に浮かんできても、ミッチャンのことを思うと、なんとか頑張れた。

あの瞬間、掃除は私の天職だと思えた。ミッチャンのおかげで。

彼女が生きていたら、今頃どうしていただろう。私と同様に結婚して子どももいただろうか。

窓ガラスに自分の顔が映ったので自然と目に入った。ミッチャンにそっくりだとよく言われた顔が、無表情にこちらを見つめている。血縁関係は全くないにもかかわらず、ミッチャンと私は周囲から双子に間違われるほどよく似ていた。身長も同じくらいだったが、どちらかというところがっしりした体型の私に比べて、ミッチャンは標準より痩せ形だった。私達は地元である神戸の同じ中学校に入学して、最初の学年で同じクラスになったことをきっかけに仲良くなったのだ。

ふいに強い風が吹いて手の中の雑巾がハタハタと揺れた。飛ばされないようにギュッ

と手に力を込める。家事代行サービスの時に身につけているエプロンの裾がめくれて、足下のガラスクリーナーのスプレー缶が視界に入った。そのパッケージには綺麗な青空が描かれている。キャップを外さずに使えるリンレイ社の製品は、効率重視の窓拭きには欠かせないアイテムの一つだ。

空いている方の手でスプレー缶をつかみ、窓に向かってプッシュボタンを押したら、フワッと粉雪のような白い泡が宙に舞った。小さな白い泡は風に乗って、バルコニーの外に儂く流されていく。

(あの時の雪も、こんな風に降ってたな)

今からもう二十二年以上前の、一九九五年二月上旬のこと。

ミッチャンの訃報が、私の耳に届いた日だった。

「光野磨知子です。『磨く』の『磨』に、『知る』の『知』で、『みちこ』と読みます。小学生の時はミッチャンと呼ばれていました。よろしくお願いします」

一九九四年、中学一年生の春。

クラスの自己紹介でミッチャンは、「みちこ」の「み」をことさらに強調していた。

「よく『まちこ』と間違われるから、覚えてもらおうと思って」とミッチャン。

「なんで親はそんなややこしい漢字の付け方したんよ」

私が聞くと、ミッチャンは目を輝かせて語り出した。

「うちのお母さん、若い頃にお金がなくて、深夜の清掃の仕事してたんだって。で、会社のマンションの廊下で床磨きしてたら、うちのお父さんがちょうど夜中まで仕事してて、それで出会ってん。その後で私が生まれたから、『外見だけじゃなくて中身も周りも磨いて、幸せな人生を送れますように』って願いを込めて、『磨』とつけたんだって。ロマンチックな話やと思わへん？」

「そやなあ。でも、その話はこんな所でも全然ロマンチックに聞こえへんなあ」

私は学校の女子トイレの床を磨くことにうんざりして言った。

私達の学校では、「中学一年生の間は、午後の掃除時間に毎日決まった場所を掃除する」というルールがあった。視聴覚室や廊下が割り当てられたラッキーな生徒がいる一方で、ミッチャンや私のようにトイレの部屋の掃除という「ハズレ」を引く生徒も少なくなかった。トイレの便器自体は学校の雇う清掃員が掃除してくれるからいいとしても、トイレ周りの床をモップで拭いたり、ゴミを回収して捨てる作業は、思春期真っ盛り

の私にとっては不快に満ちたものだった。

そんな私とは対照的に、ミッチャンはいつも熱心に掃除をしていた。細い体には不釣り合いなモップを文字通り隅から隅まで床に滑らせて、タイルの網の目に沿って何度もこすっていた。私が適当に拭いた後を見る度、ミッチャンはため息をついた。

「陽子ちゃんは本っ当に、いい加減なんだから。まだ端の方が残ってるよ」

「そんな隅の方まで行く人いないし。誰にも分からへんって」

「もう、そんなんじゃないんだって。掃除っていうのは」

腕組みをしたまま、ミッチャンは首を左右に振った。

「掃除っていうのは、したら自分に返ってくるモノなの。綺麗にすればするほど、自分の大事な幹になる部分を強くしてくれるモノなの。自分の部屋のつもりで心を込めてするのが、掃除の醍醐味やで」

ミッチャンは目をキッと見開いて私を睨んだ。同じような顔が目の前で怒っているのはなんとも奇妙な気分だった。

春が過ぎて夏の暑さの中でも、秋風が強くなって、手にアカギレの出来る冬が訪れても、ミッチャンの掃除はいつも完璧だった。掃除が終わった後はいつも塵一つない床が目の前に広がり、ピカピカに磨かれた鏡がトイレの個室の中を明るく映し出していた。

私達の友情もきつと、同じように磨かれていったのだと思う。時には喧嘩をしたり、気持ちがいずれ違ったりしたけれど、毎日の掃除時間が終わって磨き上げられた床や鏡を見たら、お互いに笑顔になれたから。

年が明けて一九九五年一月十三日の金曜日。天気こそ晴れていたが最高気温は八度を下回るような一段と寒い日だった。明日から来週月曜日まで三連休という状況下、放課後に学校の廊下を歩くミッチャンと私の心は浮き足立っていた。

「陽子ちゃんの家泊まりに行くの、ほんまに楽しみやわ」

「私も。小さい頃のアルバム、見せあっこしようね」

お互いの家が離れていることもあり、今まで一緒に泊まったことがなかった私達にとって、今日は待ち焦がれた日でもあった。

本当は学校が終わるとすぐにでも二人で我が家に行きたかったのだが、私の所属していた女声コーラス部の練習が放課後にあったため、練習が終わるまでミッチャンには図書館で待ってもらうことになった。途中まで一緒に歩いていると、彼女が「あっ」と声を上げた。

「ねえ、トイレのゴミ箱見て行ってもいい？」

ちょうど行く先に、普段私達が掃除している女子トイレが見えていた。

「さっき掃除したばかりやん。大丈夫だって」

練習に遅れて先輩に叱られるのが怖かった私は反対した。

「でも、なんか嫌な予感がするねん。お願い、念のためにちょっと見させて」

こういう時、ミッチャンに何を言っても無駄なことは分かっていたのでしぶしぶ応じた。彼女がトイレの部屋のドアを開けて入り、私も続けて入った。電気をつけた途端、目に飛び込んできた光景に二人とも唾然とした。

ミッチャンが震える声でつぶやく。

「これはあんまりやわ……ひどすぎる」

私達の目の前には、トイレのゴミ箱いっぱいこれでもかと詰め込まれたゴミの山が

あった。その上、ゴミ箱に入りきらなかったと思われる、お菓子の袋やジュースの紙パックなんか、その周囲に散らばっていた。

「ミッチャン、もう今日はこのままにしといて連休明けに片付けよう。先生に言われたら、誰かが捨てたって言えば大丈夫だよ」

私の説得が耳に入らない様子で、ミッチャンは顔を上げた。

「……私、もう一度ゴミ捨てに行ってくるわ。三連休もこのままにしとくなんて、この部屋に申し訳ないもん」

「気持ちは分かるけど……私、時間ないねん」

ゴミ捨て場とコーラス部の部室とは真逆の方向にある。片付けの時間も含めると遅刻は免れないだろう。

「大丈夫。私一人で出来るから、陽子ちゃんは先に行ってて。図書館の待ち時間が掃除時間に変わっただけよ。ほんまに気にせんと行ってね」

にこっと笑うミッチャンの瞳には、ゆるぎのない決意が感じられた。私はその強さに後ろめたさを感じて頭を下げるしかなかった。

「ごめんね、ミッチャン」

「それにしても誰がしたんやろうね。掃除した人の気持ちを無視するなんて最低やわ」

「……ほんまやね」

心当たりのあった私は、そそくさとその場を立ち去った。同じ部活の先輩達が、ゴミ箱を持ってあのトイレに入るのを何度か見かけたことがあったのだ。部室のゴミ箱は部員が交代で捨てに行くことになっているが、寒い中ゴミ捨て場まで持って行くのが面倒だからと、今回も手近なゴミ箱に捨てたに違いない。しかしながら、部活の先輩が自分の親よりも怖い存在だった当時の私にとって、犯人を特定できてもあえて注意する気は微塵もなかった。

ごめんね、ミッチャン。私の心は二重に重くなった。部活が始まって発声練習をしてもどこか上の空で、この寒空の中をあんなに大量のゴミを抱えて運ぶミッチャンを想像すると、胸の奥がきゅゅと締め付けられた。

コンクールの課題曲を練習している最中のことだった。自分のパートが終わって休憩していると、部室の小窓からミッチャンの顔が覗いているのに気付いた。目立たないように部室を出た私は、彼女を見て思わず声を上げた。

「どうしたの！？その足！」

ミッチャンの右足には包帯が巻かれ、血がにじんでいた。痛くて泣いたのだろう、彼女の目は真っ赤に充血している。

「ゴミ捨てに行く途中で転んじゃって。ちょっとくじいただけよ」

真っ赤な目を隠そうとするように額に手を遣りながら、ミッチャンは笑った。

「私が一緒に行っていれば、こんなことにはならなかったのに……ごめん」

「違うよ。私が無理して一回で全部捨てようとしたから、バランス崩しただけ」

ミッチャンに逆に慰められる形になって、私はさらに罪悪感に陥った。  
「ただ、今日泊まりに行くのは、こんな状態だから難しいかなって。陽子ちゃんのご両親にもあんまり迷惑かけたくないし」

ミッチャンの沈んだ口調に、私の心も深く落ち込んだ。

「そっかあ……まあ、こんな足で来てもらうのも申し訳ないし。でも、足が治ったら今度は絶対一緒に泊まろうね！」

「うん！もし次のお泊まりの時に雪が降ってたら、二人で雪合戦しよう」

「それいいね！約束やで」

二人で指切りげんまんした時の、ミッチャンの細い小指の強さは今でもふっと指に蘇ることがある。確かに彼女が生きていたことを、私に呼びかけるように。

どこか右足をかばう歩き方をしながら去って行く後ろ姿は、私が最後に見たミッチャンの姿だった。

そして、三連休明けの一九九五年一月十七日の早朝に全ては変わった。「ドーン」という音が地面の奥底から轟いたかと思うと、ガタガタガタと凄まじい勢いで周囲が揺れ始めた。隣で寝ていた母が私のベッドの上に覆いかぶさっているのに気付いたが、私は激しい揺れで起き上がれず、本棚から愛読書が雪崩のように母の背中に落ちていくのをただ見ているしかなかった。その時は怖いというよりも、ただその衝撃の強さに驚いていた。地震がおさまると家族で食卓の下に縮こまって、余震が来るたび体も心も震えた。

幸い私の家族は全員無事で家屋も表面的な損傷で済んだものの、水道や電気などが全て停止してしまった我が家にいることは出来ず、神戸を離れて県外の親戚の家に避難した。

(ミッチャン、大丈夫だろうか)

被災地から遠く離れて余計に心配でたまらなかった。まだパソコンも携帯電話も一般家庭にあまり普及していなかった当時、頼れる情報網はテレビやラジオ、それに新聞くらいだった。とはいえ、居候の身でそれらを自由に見ることはできず、親戚の幼子の面倒や家事などの頼まれごとばかりで、毎日があつという間に過ぎていった。

震災から数週間が過ぎたある日の朝、母が私を呼んで静かに言った。

「陽子、気をしっかり持って聞いてね。ミッチャン、地震で亡くなったんだって」

「ミッチャンって、あのミッチャンが！？」

頭が真っ白になった。嘘でしょう。そんな、あの真面目で優しかったミッチャンが、どうして。なんで。

混乱する私を落ち着かせながら、母は事の次第を語った。学校の関係者から親戚の家に今後の予定について電話があった際、犠牲になった生徒達の氏名を伝えられたこと。その中にミッチャンの名前があったこと。母は鼻をかみながら目を潤ませた。

「ミッチャンは普段二階で寝ていたらしいねんけど、足を怪我したせいで一階で寝てて、

崩れてきた二階の下敷きになったらしいわ。そのそばで、お母さんがミッチャンをかばうように重なっていたそうよ」

その言葉に私は膝から崩れ落ちそうになった。もし、あの時一緒にゴミ捨てに行っておけば、ミッチャンは転ばずにすんだのに。そうしたら、二階で助かっていたかもしれないのに。いや、もっと前に勇気を出して先輩にゴミ捨てを注意していたら、きっとこんなことにはならなかったのに！

しばらく母にすがって泣いた後、私は親戚の家の庭に出て空を見上げた。二月上旬の空はどんよりと重たく、分厚い天井が責めるような威圧感を放っている。肌に刺さるような寒さが、罰を受けるべき私にはふさわしく思えた。

やがて、ちらほらと泡のような繊細な雪が庭に舞い降りてきた。  
(もし次のお泊まりの時に雪が降ってたら、二人で雪合戦しよう)

あの時のミッチャンの言葉が、胸を深く突いた。涙がまた溢れてきた。  
「もう叶わへんねんなあ。あの約束」

口を開けると、涙と粉雪が一緒に入ってきた。冷たさと熱の入り交じったしょっぱさが、舌の上に広がって喉がひくひくと鳴った。

(会いたいよ、ミッチャン)

てのひらに落ちた粉雪がじわりと溶けて透明になる様を見て、私は、ミッチャンが磨いたトイレの床や鏡の、あの清潔な透明感を思い出していた。

「高田さん、こちらの窓もそろそろ終わります。手伝いましょうか？」

「あ、すみません。私もあともう少しなんで、大丈夫です」

バルコニーで他のスタッフから声をかけられて現実に戻った。会話が終わるとスタッフは持ち場へと引っ込み、姿が見えなくなった。空を見上げると、若干雲が引いていたものの、まだ太陽は見えなかった。

さっきから過去のことばかり頭をよぎるのは、きっと目の前の窓ガラスに自分の顔がずっと映っているせいだろう。ミッチャンは痩せ形だったから、生きていたらもう少し小顔になっていたかもしれないが。

それにしても、曇りがちな空のもとでこれほど自分の姿がくっきり窓ガラスに映るとするのは、よほど部屋の中が暗いのだろう。部屋の中が明るいと、日中は外からの光の反射が弱められるせいで、窓ガラスの外側の面にモノは映り込まないはずだから。ふと、中の様子が気になったので作業をしながら覗くと、リビングのソファに座っている家主の後ろ姿が目に入った。手元だけが光っている所を見ると、スマホをいじっているようだった。

(もしもあの時代にスマホがあつたら、ミッチャンは助かってたんだろうか)

ミッチャンの家のあたりは、近くに火災があつたせいで救助活動が難航したらしい。情報の共有化が今のように迅速に行えていれば、彼女や他の犠牲者の運命も変わっ

ていたかもしれない。

(ミッチャンがもしここにいたら、手を抜いたらアカンって怒られるな)

私は気を取り直して雑巾を窓に強く押し当てた。窓にかかったスプレートの泡を根こそぎぬぐい去るように、指の爪まで力を入れて動かす。いつかの掃除時間に、ミッチャンが教えてくれた。頑固に落ちない汚れがあったら、雑巾の上から爪に力を入れて動かすと良いよと。そうすれば磨くモノの表面も、自分の爪も傷つかないからと。

拭きとった跡にうっすらと虹模様が浮かんで、時間が経つにつれて消えていく。人の記憶も同じだ。震災でどれだけ苦しくて辛いことがあっても、時が少しずつ過去を削り取って忘れさらられていく。「神戸の街は復興した、キレイになった」と人は言うけど、実家の溝に捨てられたタバコの吸い殻や空き缶を見ると、人の心は本当にキレイになったのかと問いたくなる。大切な何かまで忘れてしまっていないだろうか。

私は違う。私は絶対、ミッチャンのことを忘れない。そして、それがミッチャンへの償いになると信じて今まで生きてきた。

(もしミッチャンが私と同じ立場になったら、何があっても逃げたりしないわ)

そう思うことで乗り越えられた試練は数えきれない。出産や育児の大変さも、それはミッチャンが得られなかった幸せの裏返しだと思えば、苦しいなんて言えなかった。

「頑張って掃除せな、ミッチャンに申し訳ないわ」

一人つぶやいて、ガラスクリーナーのスプレー缶を手に取った時のことだった。

「相変わらず磨き方が雑やね、陽子ちゃんは」

声がした窓ガラスの表面には、十代の頃の私にそっくりな顔が、当時の中学の制服を着て映っていた。——これは私じゃない。私は自分の掃除のエプロンを手でつかんで目をこらした。

「ミッチャン!？」

びっくり声を上げた私に、窓ガラスの中のミッチャンはお腹を抱えて笑った。

「そこまで驚かなくても。いつもそばにいたのに」

言葉が出ない私を前に、ミッチャンは雑巾を持って窓ガラスの向こう側から押し当ててきた。

「さあ、掃除掃除！二人でやったらあっという間に終わるよ」

促されるまま、私も持っていた雑巾をミッチャンと同じ位置に反対側から押し当てた。

風が吹いて、ミッチャンの前髪がサラサラと揺れる。その下には、いかにも楽しそうな彼女の笑顔があった。窓ガラスの中にしか存在しないのに、とても生き生きとして見えた。

「掃除は、したら自分に返ってくるモノ。綺麗にすればするほど、自分の大事な幹になる部分を強くしてくれるモノって、ミッチャン言ってたね」

「そうや！自分の部屋のつもりで心を込めてするのが」

「掃除の醍醐味やで、でしょ？」

私の言葉にミッチャンはケラケラと笑った。つられて自分の頬も緩むと、胸の中がじんわりと温かくなった。

向かい合わせの鏡のように、私とミッチャンは同時に体を動かして、雑巾を窓ガラスに滑らせた。スプレーを窓にかけたら雪の結晶みたいな白い泡模様が広がって、ミッチャンと二人で雪の中にいる気持ちになった。泡をぬぐうと薄い虹模様が現れて、徐々に模様が消えていくのと平行して街の景色や空がクッキリと浮かび上がった。次第にまばらになった雲の合間から光が差し込んできて、窓に映るビルの表層に反射してキラキラと輝き始めた。

「そういえば、こんな風によくミッチャンと鏡を拭いたね」

「そうやねえ、あの掃除時間が懐かしいわ」

あれは確かまだ残暑の厳しい九月のこと。いつもの女子トイレで、私達は洗面台の鏡拭きをしていた。

「暑いわ〜。もう、いつまで夏続くんかな」

手をうちわにして仰ぐ私をミッチャンがたしなめる。

「暑さ寒さも彼岸まで。なんでも一生懸命にしてたら、あつという間に冬が来るわ」

キュッキュッと小気味良い音を立てて、ミッチャンは鏡を拭き続けた。

「こういう時はね、楽しいことを考えて掃除すると気分も明るくなれるよ」

「楽しいこと？こんな場所で？」

怪訝そうに返事したら、ミッチャンは「ほら見て」と鏡を指さした。

「こうやって鏡の前で磨いてるとね、なんかもう一人の自分とダンスしてる気分にならへん？」

鏡の外と中のミッチャンの笑顔を交互に見ながら、私は軽くため息をついた。

「ミッチャンってさ、真面目なのに意外と子どもっぽいよね」

「そんなことないって。ちゃんと好きな人もおるもん」

頬を赤らめて言うミッチャンが、可愛く見えた。

「私はおらへんけど。でも、いつか運命の人に出会えたらいいな」

「きっと出会えるよ。陽子ちゃんは可愛いから、きっと幸せになれるよ」

「自分そっくりの人に向かって『可愛い』って、よく言えるね」

キャハハと二人で笑うと、鏡の中に映ったミッチャンと私を合わせて、四つのそっくりな顔が口を開けて笑っていた。

——これからもずっと、ミッチャンと一緒にいられると思っていたのに。

「私のせいで……ごめんね。ミッチャン」

言い終わらない内に、みるみる自分の目から涙が流れてきた。

「もういいのよ、陽子ちゃん」

ミッチャンは口元に笑みを浮かべて、でも真剣なまなざしで私を見つめた。

「これ以上、私のことで苦しまなくてええのよ」

私が窓ガラスに置いた手に、ミッチャンは自分の手を反対側から重ね合わせた。体温は全くないはずなのに、不思議とぬくもりを感じた。

「これから何をやるにしても、私への償いとか申し訳ないとか、もうそんなことは考えなくていい。私はただ、陽子ちゃんに幸せになってほしい」

気がつくと窓ガラスは隅から隅まで磨き上げられ、スプレー缶のパッケージに描かれたような、澄み渡った青空を映し出していた。

「また陽子ちゃんと一緒に掃除できて、ほんまに楽しかったわ」

「私も楽しかったよ！ミッチャンにまた会えて……嬉しかった……」

喉が引きつって声がうまく出てこない。そんな私にミッチャンが優しく笑いかけた。

「今の気持ち、忘れんといてね。それが、私が一番伝えたかったことよ」

「ミッチャン」

ふいに太陽の光が窓ガラスに強く反射し、そのまぶしさに私は目を閉じた。

次に目を開けると、もうミッチャンの姿は窓ガラスには映っていなかった。

「……ありがとう」

スプレー缶に付着していた泡が、風に乗って空の彼方へと去って行った。

家主の女性に掃除が終わったことを告げる。家主が部屋の中から窓ガラスに近づくと、暗かった顔色にほんの少し赤みが差したように見えた。

「うちの部屋から見える景色って、こんなに綺麗だったんですね」

家主の手が窓ガラスに触れた。さっきのミッチャンみたいに、優しい手つきだった。

「ずっと嫌なことばかり続いていたけど、おかげで久しぶりに気持ちが晴れました」

振り向いて笑った彼女の顔を見て、心の中にまた一つ、新たな喜びが芽生えた。

(自分の部屋のもりで心を込めてするのが、掃除の醍醐味やで)

ミッチャンの言葉が、耳の中で何度も蘇った。

マンションから出て歩いていると突然、一陣の風が吹いて私のエプロンを巻き上げた。身震いした私をよそに、鮮やかな紅葉の並木通りの中を、風は木の葉を引き連れて駆け抜けていった。あと数ヶ月もすれば、窓拭きの仕事はぐんと減るだろう。その分、室内の仕事に精を出さないと。

(なんでも一生懸命にしたら、あっという間に冬が来るわ)

そう、あとで後悔しないように、ミッチャンの分も一生懸命に掃除して、一生懸命に生きよう。そうすれば彼女が言ったように、あっという間に冬が来て、そしてやがて震災の追悼の日がやってくる。その時は、息子にミッチャンのことを話そう。ミッチャンのように、ミッチャンが磨いた鏡や床のように、澄んだキレイな心を持った大人に育てられるように。

さっきまでいたマンションの部屋を、地上から見上げた。

あの部屋からミッチャンが手を振ってくれている気がした。いつか鏡の前で見せた時

のように、晴れやかな笑顔を浮かべながら。  
(了)